

# 唐代までの書論における〈和〉字術語研究

池田 絵理香

## 【目次】

### 序論

#### 第一節 研究の目的

#### 第二節 〈和〉についての代表的な研究

#### 第三節 研究の方法

### 第一章 〈和〉字術語用例の整理

#### 第一節 〈和〉字術語用例の一覧

#### 第二節 附表「晋代から唐代の代表的な書論にみえる

〈和〉字術語用例一覧表」

### 第二章 〈和〉用例の検討

#### 第一節 1、間接的に書の趣をあらわす〈和〉

(1) 「…は〈和〉す(…和)」

(2) 「…を〈和〉す(和…)」

#### 第二節 2、直接書の趣をあらわす〈和〉

#### 第三節 〈和〉1～12の分類

### 第三章 〈○和〉〈和○〉用例の検討

〈和睦〉〈和風〉〈調和〉〈和韻〉〈織微和惠〉〈一和〉〈冲和〉

〈冲和〉〈融和〉〈雍容和雅〉〈和平〉〈靈和〉〈和氣〉〈柔和〉

〈寛和〉〈淳和〉〈和雅〉〈中和〉〈慈和〉〈洽和〉

### 結論

### 参考文献一覧

### 序論

書を評する際に、さまざまな味わいを感じられ、それでいて全体としてまとまりのあるものを善しとすることがある。こういった観点から書を評することは一体いつごろから始まったのだろうか。そこで〈和〉に焦点を当てて明・清代の書論をみると、〈和〉または〈和〉を含む術語が、書の本質を語る際に使われている。しかしほとんどの場合、〈和〉についての説明や定義づけはなされておらず、その内容は明らかにされていない。

こういった術語の解釈が、困難を極めることの最も大きな理由は、それぞれの術語の背景に、哲学や文学の分野で培われてきた考え方や価値観があるためではないだろうか。当時の人々の中では当然のこととして共有されていた意味内容を分析することが、〈和〉の理解につながると考えた。

以上のことをふまえ、本稿では、哲学・文学における〈和〉が、いかに書論に援用されているのかという点と、書論の〈和〉はどのような術語と結びついて用いられているのかという点を明らかにすることを目的とした。

研究方法は、まずはじめに唐代までの代表的な書論から〈和〉を含む用例を抽出し、通し番号(1～37)を振って一覧表を作成した。次に、それぞれの用例あるいは前後の文脈に含まれている重層的な内容を汲みとり、それらを踏まえて解釈していく。特に、思想や文学における用例が、どのように援用されているのかということに焦点をあて、〈和〉を内容ごとに分類した。

### 第一章 〈和〉字術語用例の整理

漢代から唐代にかけての代表的な書論から、固有名詞等を除く〈和〉の用例を集め、一覧表を作成した。

### 第二章 〈和〉用例の検討

唐代までの用例の内訳は、書の趣を間接的にあらわした用例(動詞・形容

詞)が十一例、直接あらわした用例が一例であった。そのうち、動詞・形容詞の用例を、何が和するのか、何を和するのか、という点から分類すると、次のようになる。(2は肥瘦について、9は点画・形体・一字・全体の章法について述べたものであり、まとめて〈形〉〈体〉を指したものとした。なお10は審美範疇語ではないため、対象外とした。)

- ① 〈形〉〈体〉……………2、9
- ② 〈勢〉〈体〉……………1、
- ③ 〈気〉……………3、6、(※〈冲和〉25)
- ④ 〈気〉〈神〉……………7、11、(※〈冲和〉24)
- ⑤ 分類不明……………8

このうち、a「二種類以上の要素が調和する」という意味の用例は、1、2、9であり、b「おだやか・なごやかなる」という意味の用例は、3、6である。残りの7、8、11は、a・bどちらの意味にも解釈可能である。なお〈気〉との関連で用いられている用例のうち、特に3、6は、〈気〉によって筆者と外界が通じ合い、また、筆者の〈気〉が書に反映するという考えのもとに用いられている。よって、ここでの〈和〉は、筆者の状態をあらわす一方で、書かれた書の趣をあらわしてもいるようである。〈気〉の流動性・運動性を調和のとれた、なごやかなものに保つ、という意味あいでも用いられているといえよう。

### 第三章 〈○和〉〈和○〉用例の検討

前章で行なった〈和〉1、12と同様に分析した。

### 結論

〈和〉を含む術語三十八例を分析した結果、唐代を境に変化がみられることが判明した。晋・梁代までは、書の〈形〉〈体〉〈勢〉の調和を述べる際に用いられ、唐代に入ると、書の形態論に加えて、〈気〉〈神〉との関係で用いられるようになっていく。特に虞世南・欧陽詢・李世民的書論には、老荘思想が色濃く反映されており、〈虚静〉という境地のもとで〈和〉という範疇が使われている。また、〈和〉によって直接書の趣をあらわすようになったのも、唐代からということがわかった。

## 【作品研究 創作】「集褚道德經」

### 《釈文》

道可道非常道 名可名非常名 無名天地之始 有名萬物之母 故常無欲以觀 其妙 常有欲以觀其徼 此兩者 同出而異名 同謂之玄 玄之又玄 衆妙之門 一章（中略） 信言不美 美言不信 善者不辯 辯者不善 知者不博 博者不知 聖人不積 既以爲人 己愈有 既以與人 己愈多 天之道 利而不害 聖人之道 爲而不爭 八十一章

### 《法量》

三四〇・〇×七〇・〇センチ 六幅

### 《解説》

褚遂良の書法に倣い、老子道德經の全文を書いた。褚遂良の「伊闕仏龕碑」「孟法師碑」「房玄齡碑」「雁塔聖教序」「雁塔聖教序記」をもとに、特に「雁塔聖教序・記」の書風をベースにした。

制作にあたっては、最初に褚遂良の字典を制作し、老子の本文を集字していった。褚遂良の作品の中に無い文字は、唐代・隋代のものから骨格を確認し、褚遂良の字から偏と旁、あるいは点画の一部を寄せ集めて拵えた。

調べ進めていくうちに、唐の三大家である欧陽詢・虞世南・褚遂良の三人の字様は必ずしも一致しないということや、当時は異体字の使用がかなり寛容であったことがわかり、褚遂良の作品にない文字の推測、判断に非常に頭を悩ませた。字の書風、筆法、結体が似ている作品は、字様も共通する可能性が高い傾向にあることがわかったため、魏栖梧「善才寺碑」や、薛稷「信行禪師碑」等を積極的に参考にした。

## 【作品研究 模刻】「漢印十顆」

### 《釈文》

隗長 魏霸 魏僚 辛偃 接治 趙安 劉熹 劉疵 呂鄉 和福  
※紙面の都合上、四顆を掲載（いずれも原寸）

### 《法量》

一五〇×一一〇センチ 一冊

### 《解説》

修士論文のテーマが書の中和美に関する内容だったことから、作品とも関連をもたせたいと考え、右の十顆を選んだ。よって漢印の中でも、一つの印の中に点画の方円を織り交ぜ、調和させているものをメインに選んでいった。

十顆のうち「隗長」は印面に傷んでいる部分があったが、あえてそのまま模刻した。「長」の部分は特に損傷がはげしく、もとの点画なのか、傷んで欠けた部分なのか判別し辛い箇所があったため、一度元の状態に復元し、欠ける前の姿を確認してから模刻した。

